

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 カズオ・イシグロ 『わたしを離さないで』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 88 回のツイキャス読書会の課題図書は、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『わたしを離さないで』あらすじのようなもの

キャシーは31歳、優秀な介護人を11年以上もやっています。提供者を選べるようになって3、4人目に選んだのが友達のルースでした。ヘルシヤム以外の出身の方を介護していてヘルシヤムで過ごしたキャシーは、友達のルースや痲癩持ちのトミーやその仲間たちがいかに幸せだったかを嘔みしめました。

ヘルシヤムで過ごした子供の頃は年に4回生徒たちで作った作品の交換会や欲しいものを手に入れられる販売会があった。優秀な作品はマダムと呼ばれる人選ばれていた。トミーはいつも作品を出していなかったが、ある日保護官であるルーシー先生に無理に作品を作らなくていいと言われる。

キャシーは販売会でジュディ・ブリッジウォーターの「夜に聞く歌」のカセットを買った。その中の『わたしを離さないで』という曲に特別な思いを持った。

ある雨の日、ルーシー先生は生徒であるキャシーたちに「あなた方の人生はもう決まっています。ヘルシヤムを出て、いずれ臓器提供がはじまり、そのために作られた存在です」という話を聞かされる。

ヘルシヤムを出てコテージで共同生活を始めるが後にキャシーは介護人になるために仲間たちと別れる。

キャシーはルースの介護人になり、トミーとの仲を裂いてしまっていた事を謝罪される。

トミーは優秀な作品が本当に愛し合っている者同士であるという証明になると信じ、絵をマダムに見てもらうために会いに行くが全ては、ただの噂だった。トミーは野原で荒れ狂った。

トミーが4回目の提供を前に、キャシーに自分の介護人を辞めてもらう事を希望する。

キャシーは提供者であるトミーたちから遠ざけられ、打ちのめされた。

一人になったキャシーは1度だけ空想の中でトミーを見た。涙は出ても泣きじゃくることはしないで、自分の行くべき所に行きました。

(おわり)

メルマガ読者 エヴァータさん

『沼地の日本にて』

「もうすぐいい薬ができるはずなんだけどね」

「はあ」

眼科のかかりつけ医と私の「コピペ」のようなやり取りをここ数年繰り返している。遺伝子レベル、細胞レベルの研究は目覚ましい。考えてみれば10年前なら薬のくの字も出ていなかった。

日本臓器移植ネットワークによると、心臓、肺、肝臓、腎臓、小腸の移植希望者は全国で約1万4千人。2017年度移植件数は400件ほどだったそうだ。

それを多いと見るか少ないと見るか。

人に臓器を提供する為に生まれ育ったヘルシャルムの子供達がどんな気持ちでいるか考えながら本作を読み、感想文をかいている。

人に喰われる為に生まれ育てられた動物と違い、こども達は食欲性欲睡眠欲より上の欲求があり、未来を予見する力がある。

どうせ妊娠できないのにセックスをする気持ちってどんなだろう？

ただ気持ちいいだけなら、心の隙間を埋める為なら別にいいのかな？

どうせ叶わないのに、将来の夢を見てしまう気持ちってどんなだろう？

ルースが言った「挑戦してみる」という言葉や、キャシーのような相手を思いやる心を大事にしないと、どんなに技術が発展し病気も障害も老いもない世の中でも、ただ納税する為に働き、こどもを作るためだけに死ぬまで生きる世界では寂しい。

(おわり)

こころの遺失物保管所

物語は、終始穏やかな語り口で綴られるキャシーの半生の回想記録。

そこに描かれていた物語が非現実的な設定でも、書かれていることは、わたしたちの日常の延長線上にある現実のことだと思った。

臓器移植と生命倫理。

人間とクローンの違い。

人権とは。尊厳とは。

与えられる者と与える者。

貧困と差別。

運命と宿命。

それらについての答えの出せていない、この世界の問題を問われている。

いま、わたしの心の真ん中にぽっかりと穴が空いている。

すき間から淋しくて心許ない感情が入り込み、泣きたい気持ちがあるのに涙にならない不安な読後感に包まれている。こころの一部を失ってしまったのだろうか。そして、わたしはまだこの物語と向き合えていないと感じている。

「—— わたしは一度だけ自分に空想を許しました。—— 半ば目を閉じ、この場所こそ、子供の頃から失いつづけてきたすべてのものの打ち上げられる場所、と想像しました。いま、そこに立っています。待っていると、やがて地平線に小さな人の姿が現れ、徐々に大きくなり、トミーになりました。トミーは手を振り、わたしに呼びかけました……。空想はそれ以上進みませんでした。わたしが進むことを禁じました。顔には涙が流れていましたが、わたしは自制し、泣きじゃくりはしませんでした。—— 」

友人を、恋人を失い、感情の機微と将来を想像することすら自制して、得るものよりもなくすことばかりのキャシーの人生。イギリスの東端、ノーフォークは限りなく色彩のない、憂いに満ちた最期の情景だった。

この情景を作家は見せたくて、この物語が回想としてはじまったのかもしれない。最後まで読み終えてそう思った。もう一度、最初の頁から読み直そう。今度はもっとゆっくりと。

自分のこころを失わないようにしっかり抱きしめておかないと。わたしのこころは、わたしのものだから。

(おわり)

『 人は何に跪くのか 』

以前、白血病で夫を亡くした知人の縁で、骨髄バンク登録を考えたことがあった。ところが、登録には身内の承諾が必要だった。「ドナーリスクがあるなら、承諾はできない。身勝手かもしれないけど。」との身内の意志を無下にできずに、登録できないままになっている。骨髄だけではなく、すべての臓器提供が善意によって成り立っている。

善意だけでは「安定提供」はできない。でも、技術的に治せるなら治したいとの欲求が首をもたげるのは自明の理だ。その為には「安定」が欲しいのだ。人間の果てしない欲望の闇が、この小説に横たわる。

世界初の試験管ベビーが誕生して、40年が経つ。当時は宗教指導者、政治家、医師、科学者らが誕生の是非を論じたいらしい。しかし、今では体外受精は当たり前の治療だ。この治療が誰かの光である限り、否めないことだろう。

この小説の臓器提供のためのクローン人間の世界も、現在は宗教的・倫理的見地のハードルがまだ高い。しかし、人間の欲望の前には、そんなハードルは心許ないということを歴史は証明している。だから、エミリ先生とマダムの思惑は頓挫したのだ。犠牲になる人間の一方で、救われる人間がいるという事実がどうしようもなく…切ない。

この小説のクローンの子供たちは、何ひとつ私たちと変わらない。友情や恋愛、いじめや嫉妬など、私たちと同じ思春期や人生を送っている。ルースのように、他人の欲を欲するところまで同じだ。どうしても、この子供たちをマダムのいう「かわいそうな子供たち」という視線で見つめてしまうが、自らが提供を受け入れる側になっても同じ気持ちを持ち続けられるのだろうか。感謝こそすれ、人間はその先を考えないように、あるいは論点をすり替えるようにして、欲を満たしていくのだろうか。人間は、これからも神ではなく「欲」に跪きながら生きていくのだろうか。

古代の人間は、槍で狩りをしていた。その方法は、不安定で死活問題だ。そこで、家畜というシステムができた。なるほど…供給は安定するし、計画的に「生産」できる。現在の私たちにとって、何の疑問も罪悪感も持たない。当たり前だからだ。だが、家畜は自由に草原を走れないし、人間の食の為だけの人生だ。養豚場の豚とペットのミニブタは何が違うのだろうか。生きている豚とスーパーの切り身の豚は認識しているが、その間の「屠殺」という事実は忘れたふりをする…私を含めて。

「提供」のために亡くなる人間のことも、この小説のように見ないふりする時代も近いのかもしれない。やり切れないけれど。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>
スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『往けるものよ、まったきに往けるものよ』

ルースのやっていたジェラルディン先生親衛隊のくだりが悲しかった。彼女は、先生を何かから守っているという物語を友達も巻き込んで、本気で信じるという遊戯。

ルースが親衛隊を組織するのと同じことを私たちだってやっている。それを信じられなくなれば、寄る辺なき世界への不安に耐えられなくなり、狂うだろう。すなわち、トミーが激怒するのは、狂気の一步手前だ。神から見放され、魂を奪われ、自由を奪われて、それでもなお、この世に存在するというのは地獄だ。その孤独に耐えて、クローンは生きている。彼らは人間のように扱われて生きているが、臓器提供の使命を終えて、死んでしまえば、存在そのものがロストコーナー行きだ。

彼らは、座礁した船のように、物質的現象としては、存在するが、航海すべき海を持っていない。手段としての存在であって目的を持たない。

「わたしを離さないで」

この題名の意味はなんだろう。私の存在の核心を、離さないで。クローン人間という存在の核心はなんだろう？ マダムとエミリ先生の結論は、クローン人間に核心はないということだった。逆説的に言えば、ロストコーナーこそ彼らの核心だ。

人間の存在には核心があるのか？ 私たちはあると信じている。

だが、クローン人間には、核心があると信じることを許されてはいない。彼らの存在に核心があると信じてしまえば、彼らクローンを、同じ人間として扱わなければならない。

臓器を提供する手段として、人間を見ることはできない。それは、倫理に悖る。人間の社会秩序を支えるフィクションを破壊する。なぜなら、人間の現実存在は、一応は目的だからだ。

しかし、仮に、その目的が、仮象でしかなかったら。

私たち人間は、存在しないも同然だ。同じく、クローン人間も存在しない。そもそも、目的が嘘なのだから、人間もクローンも存在しないし、そもそも、ロストコーナーも存在しない。

そんなことを、この世にしながら悟ることができるのか。

智慧の完成があるとすれば、般若心経にあるように、その真理は、「人間は、いまだ存在していない」ということだ。

目的もなく、実体もない。ただ、この世は、悟りきれない衆生の執着が、嘆き続けるだけの仮象なのかもしれない。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343